

トヨタ財団研究助成プログラム  
オープンワークショップ（福岡会場）参加記

九州大学大学院人間環境学府 小林昇光

執筆者は、所属先の大学院で教育学（主に教育行政、教育政策）を専攻している。

今回のオープンワークショップ（福岡会場）に参加して、各報告・議論を拝聴することによって、「研究者と研究対象の関係」について考える機会となった。

今回行われた報告は合計6件であり、問題意識などが近い報告が2件・1セッションとしてプログラムが組まれていた。

第1セッションでは、鈴木愛氏「バングラデシュ北東部の湿地におけるスナドリネコと人との軋轢緩和に関する研究—軋轢の基礎調査と軋轢緩和における住民参加型調査の可能性—」、渡邊悟史氏「ヤマビル対策のフィールドワークを通じた人間と動物の『共生』概念の再構築—トラブルに関わり続けるプロセスとしての『共生』—」が報告された。ここでは、人と動物の「共生」、延いては現代社会における共生が主たるテーマとして取り上げられていたと捉えている。鈴木氏は調査対象であるスナドリネコを「媒介」として、調査地行政との連携、住民参加型調査を実施することで、住民が抱く野生動物への「認識」の再構成を試みていた。他方、渡邊氏は研究者である自身を「ストーリーテラー」としたうえで、住民がヒル採りなどを通して、「不気味なもの」と対話している様相を分析している。調査地で行われている、ヤマビルという「不気味なもの」を見つめる営みでは、ヤマビルを単に排除せず、自らが歴史及び社会を捉え直す姿勢を保つ契機になり得るとの意見提示がなされていた点は示唆に富む。両氏の報告からは研究者がフィールドに入り、フィールドと対話しながら共生関係の構築に関与的に観察していたと理解している。

第2セッションでは、蓮行氏「地域社会における多世代共創型演劇ワークショップによる効果の総合的・定量的評価」、横山泰三氏「自助グループにおける哲学的対話の効果に関する国際比較研究」が報告された。蓮行氏は演劇ワークショップを通じた他者理解、互助関係の構築、多分野の視点（経済、心理、医学等）による効果の総合的・定量的評価を試みていた。横山氏は、国際的な自助グループを対象とした合同ワークショップを行うことで、自助グループの相互交流、自助グループ支援の標準化が目指されていた。第2セッションの議論では、「対話」が共通項として設定されていたように思う。ここでは、研究者が研究協力者達に「対話」の場を設けることにより、結果的に、協力者の価値観の捉え直しや「気付き」を得る場面になっていたと捉えている。

そして、第3セッションでは岡村健太郎氏「歴史研究者と写真家の協同による自律型地域社会の形成に向けた三陸沿岸集落アーカイブの構築」、前平泰志氏「教育における時・空間の統合の研究—京都府・童仙房地域を中心にしたフィールドから学べるもの—」が報告された。岡村氏は、研究者自らが撮影などで蓄積してきたアーカイブを地域に還元し、地域が使

えるようにすること、外部から地域の「価値」を評価することを試みていた。前平氏は、従来の教育研究が捉えていた時間・空間を、童仙房地域のフィールドワークを通して見直すことを試みていた。特に、新たに何かを学ぶ、授けるという既存の「教育」概念の組み直しを図っており、研究者自身が「リフレクション」の姿勢を持って、研究をすすめることの重要性が提起されていた点は示唆的であった。

以上、3つのセッションから、①研究者による研究行為を通じた関与型観察、②「対話」の場の提供・観察、③フィールドにおける「価値」の探究と住民への橋渡し、④研究者によるリフレクションの姿勢による価値創出の4点を見出した。

特に、前平報告で触れられた、研究者による研究対象に対するリフレクションの捉え方は、教育学を専攻する立場としてはより示唆的であった。これまで、様々な実践や事象に対してリフレクションという「レンズ」を照らしていくことは、教育学では頻繁にされている。

だが、この行為は新たな研究知見を見出していくためのものであり、研究者が自省的に行うものとして理解されているケースは少ない。取り上げられたリフレクションを拡張的に考えるならば、研究における「課題」が研究者自身の研究課題なのか、それとも研究系譜上、社会的課題なのか。この点が、実社会との接点を持ちながら研究をすすめるにあたって、考慮することを改めて考える機会となった。

冒頭でも述べたように、今回のワークショップでは「研究者と研究対象の関係」を再考する機会になった。いずれの報告でも、新たな価値創出を目指していくにあたり、研究者はいかなる姿勢で対象を観察するのか。そして、いかにして研究と社会を繋げるのかをより深く考える機会となった。そのため、今回のワークショップは、これまでに執筆者が参加した研究発表会、研究助成団体の交流会とは一線を画していた。

今回の参加を通して、トヨタ財団の研究助成は単に資金を交付するに留めず、研究者としてのあり方や姿勢を問うている側面も含まれているのではないか。「新たな価値」を創出していくにあたり、研究者はいかにして研究対象（事例）と向き合うのか。いかなる姿勢で研究遂行をしていくのを考えるに至った点は、今回のワークショップに参加することで感じた「意外」な点であった。

今回のワークショップに参加することで、自身の研究姿勢、研究内容の意味について再考することができた機会となった。今回の経験を今後の研究にも活かしていきたい。

(以上、2251文字)